

学校教育と連携した「地域で支える公共交通の構築」の事例*

A case study of local support for public transportation cooperating with elementary school education*

宮地岳志**・太刀掛眞治***・永岡文雄****・加藤博和*****・西村智明*****・岡田あかね*****

By Takeshi MIYAJI**・Shinji TACHIKAKE***・Fumio NAGAOKA****・Hirokazu KATO*****・Tomoaki NISHIMURA*****

1. はじめに

中山間地域など人口密度が低く、需要が多く望めない地域では公共交通の維持存続は容易ではない。そうした地域においては、公共交通の運行計画策定の段階から行政、交通事業者、地域が協働で取り組み、地域で支える公共交通を構築することが重要である。

「地域で支える公共交通の構築」を達成するための1つの手法として学校との連携がある。総合的な学習の時間や社会科の授業を通じて、地域の高齢者の移動実態・ニーズなどを学習することにより、将来の地域の担い手となる児童・生徒の意識の醸成、および保護者や地域への波及効果が期待される。

本事例は、東広島市福富町において実施された「主に高齢者の通院・買物の移動を担う公共交通の導入」をテーマとして総合的な学習の時間を活用した地域学習を実施したものである。本稿では、学習の実施体制・進め方、学習プログラムの内容、児童の感想、担任教諭・学校長による学習プログラムの評価、学校教育との連携による地域への波及効果の整理を行うとともに、今後、総合的な学習の時間を実施する際の留意点、課題を抽出する。

2. 学習プログラムの概要

(1) 本プログラムの対象

本プログラムは平成19年度に地域公共交通の導入が行われた広島県東広島市福富町の竹仁小学校4年生（1クラス13名）、久芳小学校4年生（1クラス24名）を対象とした。

(2) 本プログラムの位置づけ

本プログラムでは地域学習の一環として、“地域公

共交通の導入”をテーマとした総合的な学習を実施した。地域の豊かな自然環境や人口減少・高齢化が進む地域の現状とともに、高齢者の現在と今後の移動環境を学ぶ中で、地域及び地域公共交通への理解と愛着を育むことをねらいとした。また、授業の波及効果として保護者や地域住民の意識醸成を期待するものであった。

(3) 授業の概要

本プログラムでは、計14時限にわたる5回の授業を実施した。5回の授業を通して、地域公共交通への関心の向上が図られるように、かつ、小学4年生までの学習内容を応用できるように配慮した。

表-1 授業の概要

	授業内容	学習のねらい
第1回授業	地域の高齢化の状況の学習、高齢者の疑似体験	地域の状況把握と高齢者等の立場で考える視点の育成
第2回授業	インタビュー調査（宿題）による高齢者の日常的な移動の分析	コミュニケーション能力の向上、集計・グラフ化による分析能力の育成
第3回授業	新しい地域公共交通の名称の検討	発想力の育成、責任感の醸成
第4回授業	地域公共交通“ふくふくしゃくなげ号”の試乗体験	体験を通じた移動手段確保の必要性の実感
第5回授業	学習成果発表会	学習内容をまとめる力の育成、説明・発表能力の育成

3. 学習の実施体制・進め方

(1) 実施体制

小学校校長、担任教諭、行政、学識経験者、コンサルタントで構成するメンバーで実施した。

(2) 学習の進め方

総合的な学習の時間の実施のため以下の手順で学校との調整を行った。

a) 年間計画への組み込み

本プログラムは平成19年度に実施したものであるが、平成19年度の年間計画の作成が行われていた平成18年度末（2月始め）に行政が学校長へ学習プログラムの協働実施のアプローチを行い、4年生の総合的な学習の時間の年間計画に組み込んだ。

b) 総合的な学習の年間計画の協議

平成19年度（新年度）になり、行政、学校ともにメン

*キーワード：モビリティマネジメント・公共交通計画
**正員、工修、株式会社バイタルリード広島支店
（広島市安佐南区緑井4-33-9-301、TEL・FAX082-876-2809）
***国土交通省中国運輸局企画観光部
****東広島市企画部企画課
*****経営情報学博、米子工業高等専門学校
*****正員、工修、株式会社バイタルリード広島支店
*****株式会社バイタルリード広島支店

バーが確定した時点で、年間計画について実施内容、実施時期等を協議・決定した。

c) 授業前の綿密な打合せ

毎回、授業実施前に学校長、担任教諭、行政、コンサルタントにより協議を行い、授業内容、教材、役割分担など詳細を詰めた。

4. 授業プログラムの内容

(1) 地域の高齢化の状況の学習・高齢者疑似体験（2校合同授業）

3人に1人が高齢者という地域の高齢化の状況を把握するとともに、高齢者疑似体験を通じて移動の困難さ、バリアフリーの必要性など高齢者の視点を学んだ。

a) ノンステップバスに乗車して学校から学習会場である福富支所へ移動

b) 問いかけ形式での講義

-支所まで移動してきたバスの特徴は？

-福富町にはどれくらいお年寄りが住んでる？

c) 高齢者疑似体験・車椅子体験

・3人1組で1人は体験者、1人は介助者、1人は観察者のロールプレイを行った。

・ノンステップバスの乗降の高齢者疑似体験も行った。

d) 児童感想発表

・児童の視点から高齢者疑似体験の感想を発表した。



写一 高齢者疑似体験

(2) インタビュー調査による高齢者の日常的な移動の分析（グループワーク）

夏休みの宿題であった高齢者へのインタビュー調査を通して高齢者の移動に関する情報収集を行い、結果を集計してグラフを作成した。また、整理結果をもとに学級全体で高齢者の移動について考えた。

a) インタビュー調査による高齢者の移動の把握

-日常の移動先や手段

-普段困っていること



写二 インタビュー結果の整理

b) インタビュー調査結果の集計・グラフ化

・宿題として各自3人以上の高齢者を対象にインタビュー調査を行った。4～5人で構成するグループにわかれて調査結果を集計し、グラフ化した。

c) インタビュー調査結果の考察・発表

・担任教諭からヒントをもらいながら児童各自が個人の感想を記入した。

・児童全員が自らの意見を発表する機会を持つため、個人の感想をもとにグループ内で意見交換を行った。その後に、個々が学級全体での発表を行った。

(3) 新しい地域公共交通の名称の検討（各校別）

宿題として児童が保護者等と一緒に考えた新しい地域公共交通の名称を各校の候補に絞った。その結果をもとに、地域住民、商工会等を含む福富町における地域公共交通導入の検討委員会により“ふくふくしゃくなげ号”と決定した。福富の“福”と、福富の花である“しゃくなげ”から名づけられた。

a) 児童が主体となり保護者等と名称を考案

b) 学級全体での候補を絞り込み

・担任教諭が児童の考えた名称一覧を作成した。

・児童各自が自分の考えた名称の根拠を説明した。

・意見交換、挙手制の多数決を繰り返し、各校の候補の絞りこみを行った。

(4) 地域公共交通の試乗体験（各校別）

新たに導入される地域公共交通の運行経路を児童が運行開始前に試乗体験した。自宅や友人宅、診療所や商店を通過することにより児童の地域公共交通に対する親近感の向上を期待した。

a) できるだけ自分たちの住む地域を通過するコースの車両に試乗

b) 車中における運行内容の説明と問いかけ

・運行日、頻度、運賃などを説明した。

・次のような問いかけを行った。

-病院に行こうと思ったらどうしたらよい？

-買物に行こうと思ったらどうしたらよい？

-西条(路線バスの乗換えで、40分程度で移動可能な市街地)に行くにはどうしたらよい？

-自宅からはどこで乗れるか？



写三 地域公共交通の試乗体験とその後の意見交換

c) 試乗体験を踏まえ問いかけ形式の意見交換

次のような問いかけ形式の講義を行った。

-ふくふくしゃくなげ号をどう思いますか？

-どんな人がたすかると思いますか？

-ふくふくしゃくなげ号をずっと続けていくためにはたくさんの人に乗ってもらう必要があります。

そのためにはどのようにすればよいですか？

(5) 学習成果発表会（2校合同授業）

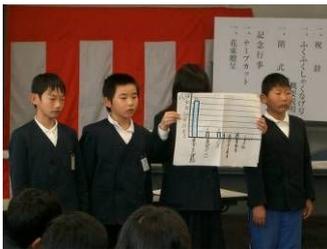
地域公共交通の試験運行開始時に地域住民を交えた出発式を行った。それに合わせて、担任教諭の指導のもと総合的な学習の時間での学習内容の発表会を行った。4～5人のグループにわかれ、各グループ創意工夫のみられる発表があった。地域住民と学校との良い交流機会となった。



写一四 始発便で会場に向かう児童と地域住民



写一五 高齢者疑似体験を通じて学んだことの発表
(左：疑似体験の再現、右：疑似体験のイラスト)



写一六 高齢者インタビュー
写一七 運行ルート上の施設の紹介
で学んだことの発表

5. 学習プログラムの評価

(1) 地域の高齢化の状況の学習・高齢者疑似体験

a) 児童の感想

高齢者疑似体験を通じて高齢者の不自由さや気持ちを理解したという意見が多かった。また、高齢者のことをもっと知りたいという意見もあった。

b) 学校長・担任教諭の評価

学校のみで実施が困難な高齢者疑似体験ができたこと、福富町の高齢者の状況を学習プログラムの導入部分とすることの有効性について評価が得られた。以下、評価内容を挙げる。

- ・国語の学習で福祉に関する教材を扱うが、実際に高齢者の体験や車椅子経験を児童1人1人ができる場は学校だけでは設定することが困難である。
- ・福富町の高齢者の状況は、児童にとって初めて知ることが多く、興味を持って取り組むことができ、

学習の導入として有効であった。

(2) インタビュー調査による高齢者の日常的な移動の分析

a) 児童の感想

高齢者のインタビュー調査の集計結果と自分の普段の感覚をもとにした感想が多くあった。また、現在、高齢者は自動車の利用が多いが、将来、運転できなくなる人も増えることが予想され、そうした人が困らないようにすべきとのコメントもあった。

b) 学校長・担任教諭の評価

算数や国語などの学習内容の実生活への適用、複数科目の学習内容の総合的な応用、自己有用感の実感について評価が得られた。一方で、授業間隔の長期化、学習意図の伝わりすぎによる児童の意欲低下の指摘を受けた。以下、評価内容を挙げる。

- ・算数で学習した集計やグラフ作りを自分（達）で行ったインタビュー調査結果に適用し、実生活との関連付けができた。
- ・作成したグラフを学級全体で考える授業展開で、自分が作ったものが役立つという自己有用感が持てた。
- ・国語、算数、道徳などとも絡めた授業にできた。
- ・前回の授業と間があいてしまったため、児童の意欲が下がってしまった。
- ・学習内容の意図が児童に伝わりすぎてそれ以上の意見を出しようがなかったため、児童の積極性が下がる要因となった。

(3) 新しい地域公共交通の名称の検討

a) 学校長・担任教諭の評価

児童の積極性、創造性、論理力の育成、家庭でのコミュニケーション促進について評価が得られた。以下、評価内容を挙げる。

- ・自分たちの考えた名前が実際に走るバスの名前になるということで、児童も一生懸命に名前を考えた。
- ・児童の提案の多くが同じ名前になると想定していたが、多様なものとなり豊かな発想に担任の方が驚かされた。
- ・根拠を持って名称を絞りこむプロセスを踏んだので、論理力を育む上でもよい学習になった。
- ・宿題としたため家族と一緒に考えることができた。

(4) 地域公共交通の試乗体験

a) 児童の感想

『たくさんの人に利用してもらうには？』に対して、高齢者などに地域公共交通の情報提供を行う、地域公共交通のセールスポイントを書いたポスターを作成するなど、自分でできる内容の提案が数多くみられた。

b) 学校長・担任教諭の評価

試乗による臨場感の体感、総合的な学習の対象となっていない学級への波及効果（地域学習への地域公共交通の利用）に評価が得られた。以下、評価内容を列挙する。

- ・実際に試乗することで現実として児童に受け入れられた。
- ・学校での反応もよく、地域公共交通を利用して地域探検、施設見学をしたいという声も聞かれ、実際に地域公共交通を利用して地域探検をした学級もある。

(5) 学習プログラム全体

a) 児童の感想（まとめ）

『福富町にどうなってほしい?』に対して、

お年よりが暮らしやすい地域、みんなで助け合う地域になってほしいとの感想が多数あった。緑豊かな特性を活かしつつ、商店や観光施設があり、施設移動に地域公共交通を利用してほしいとの意見も数多く見られた。

b) 学校長・担任教諭の評価

児童が地域公共交通を考えるという視点を得たこと、児童が地域公共交通に愛着を持てたこと、協働での授業の進め方に評価が得られた。また、地域公共交通の利用に関する追跡調査、利用促進に関する学習の希望・提案があった。以下、評価内容を列挙する。

- ・児童は地域で遊び、地域の探検などを通して地域に愛着を持っているが、視点は身の回りの自然や家庭・学校のことがほとんどである。その中で「地域の公共交通を考えよう」という新しい視点を得たこと、地域について考えるよい機会になった。
- ・現在の福富から将来の福富を考えることができた。
- ・地域について調べ自分たちで考えた「ふくふくしゃくなげ号」が形として残ることで、その地域公共交通が将来も走り続けてほしいという願いを全ての児童が持って学習できた。
- ・授業は学校の計画に沿って学校の意見ややり方を尊重した内容であり、授業前の調整は、早めに担任教諭を交え具体的な内容を詰める協議を行ったことで、授業を円滑に進めることができた。児童もしっかり学習できた。
- ・追跡調査を行い、曜日や月の利用状況を調べてみるとよい。
- ・今後、利用促進を対象に学習の場を提供してほしい。

6. 学校教育との連携の地域への波及効果

a) 児童の保護者

児童の保護者への波及効果を把握するために総合的

な学習の時間の学習前、学習後にアンケート調査を実施した。その中で、公共交通の必要性（5段階評価）、公共交通維持持続のための地域負担の賛否を尋ねたが、学習前後の差異は確認されなかった。保護者の意識向上の定量的な効果は確認できなかったが、約9割の家庭において児童が話し手となって地域公共交通が話題となったことが確認され、地域公共交通の存在は認知された。また、保護者の地域公共交通に関する自由意見を学習前後で比較すると、学習後は意見内容の積極性、具体性が増して地域公共交通への関心の高まりが確認された。

b) 地域

高齢者インタビュー調査、学習発表会において地域の高齢者と交流の機会を設けることができた。

当初は小学校の総合的な学習の時間のみの連携を計画していたが、事業を進める中で連携の範囲が広がった。地域内の中学校から要請があり社会科の授業への資料提供、行政担当者による地域公共交通の紹介が行われた。また、小学校主催の地域公開研究会などへの参加を通じ、学校のみならず、総合的な学習の時間に携わる地域住民や組織との交流を図ることができた。

7. おわりに

本事例では、東広島市福富町における学校教育と連携した「地域で支える公共交通の構築」の事例を紹介した。学校教諭、学校長と協働で学習プログラムを計画・実施することによる地域公共交通に関する児童の関心、さらには保護者の関心の向上が確認された。また、今回の総合的な学習の対象外の学級における地域公共交通を利用した学習の実施が行われ、学校内での波及効果が確認された。2つの学級での取り組みが、僅か1年あまりの間に中学校の社会科の授業、さらに総合的な学習に携わる地域住民・組織との交流へと地域の中で広がりを見せた。このような取り組みの継続が地域の意識向上に繋がると考える。

個々の学習プログラムにおいては、学習内容の意図の伝わりすぎによる児童の思考範囲の限定、授業実施間隔の長期化が意欲低下に繋がる場面があった。

今後は、児童の意欲へ配慮した学習プログラムとするとともに、行政のみならず、地域、交通事業者を含めた支援体制による学校教育との連携を図り、児童の学習、地域の公共交通に関する意識醸成を図る継続的な仕組みを構築する必要がある。平成20年度は“地域公共交通の利用促進”をテーマとした総合的な学習の時間の実施が予定されている。